

外科学（第二）

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1)大腸癌の肝転移機序及び治療法の確立に関する研究</p> <p>大腸癌の肝転移予知を確実なものにし高危険群に対する治療法の確立につなげる。癌の浸潤や転移の過程で重要な役割を担っている細胞接着分子や癌遺伝子、癌抑制遺伝子などの動態に着目して肝転移の予後を左右する予知因子を検討し、臨床応用への寄与をめざす。実験的研究ではラット、マウスにて自然肝転移モデルを確立し、細胞接着分子より精製した細胞接着ドメインなどを用いて転移抑制をはかり、悪性腫瘍の転移能のコントロールにつなげる。</p>	<p>亀岡教授 齋藤(登)准教授</p>	2
<p>(2)手術侵襲に伴う生体反応の検討*</p> <p>手術侵襲により活性化されるマクロファージは一連の炎症反応の鍵となり、IL-1やTNFなどの多種のサイトカインを産生してサイトカインネットワークを活性化する。しかし、炎症性サイトカインの増加は各種の臓器障害を来し、ひいては生体の代謝に不利な反応を生じる。各種の侵襲程度における生体反応を検討する。</p>	<p>亀岡教授 板橋准教授</p>	1
<p>(3)遺伝子を用いた微小転移診断 *</p> <p>遺伝子を用いた微小転移診断を、胃癌、大腸癌の腹腔内洗浄液やリンパ節を対象に行う。サイトケラチン19のmRNAをTRC法を用いて測定し、免疫染色をもちいた病理的微小転移診断と比較し、臨床応用を検討する。</p>	<p>瀬下准教授</p>	1
<p>(4)乳癌患者における血中循環癌幹細胞（CTC）に関する研究</p> <p>CTCについては、これまで転移性乳癌患者における予後因子としての意義や早期治療効果の予測因子としての有用性が報告され注目されている。研究では、CTCを測定し臨床病理学的諸因子と対比して検討するほか、CTC自体のHER2やホルモン感受性を検出し治療効果の予測や治療効果判定への応用の可能性について検討する。</p>	<p>神尾准教授</p>	1
<p>(5)小児腹腔鏡手術時における気腹の生体への影響に関する検討 *</p> <p>近年、成人領域同様、小児外科領域においても腹腔鏡手術の導入がすすみ、今後益々発展することが考えられるが、その際、最も問題となるのは安全性である。これまでに、気腹が脳室一腹腔シャントに及ぼす影響の実験的・臨床的検討を行ってきたが、小児では成人に比し小児特有の様々な病態があり各病態下での安全性に対する検討が必要である。特に重症心身障害児に対する腹腔鏡手術時の様々な影響を中心に検討する。</p>	<p>世川准教授</p>	1

\*：医師免許取得者 対象